

J.S.Bach Sinfonien

バッハ シンフォニア

第1番 ハ長調 BWV787

- 楽曲分析と演奏法 -

著者：市花 真弓

目次

はじめに、インヴェンションとシンフォニアについて	3
1. バッハ「シンフォニア」第1番 C dur BWV 787 楽譜	4
2. バッハ「シンフォニア」第1番 C dur BWV 787 第I展開部の楽曲分析と演奏法について	6
3. バッハ「シンフォニア」第1番 C dur BWV 787 第II展開部の楽曲分析と演奏法について	8
4. バッハ「シンフォニア」第1番 C dur BWV 787 第III展開部の楽曲分析と演奏法について	10
5. バッハ「シンフォニア」第1番 C dur BWV 787 第IV展開部の楽曲分析と演奏法について	12
6. 楽譜に1～4のアナリゼの内容を表記しました。 テンポ、強弱も記しました。	13

■はじめに

2003年度からメールマガジンの配信システムを利用しました音楽講座としまして、「バッハ インヴェンションを弾いてみよう！- 楽曲分析と演奏法 -」の発行を始め、2012年にPDF書籍版に移行致しました。思いがけず、多くの皆様にご利用頂き、パソコンの前で頭が下がる思いであります。

2019年3月～2020年5月、バッハ インヴェンション全15曲の全面作り直しを致しましたが、シンフォニアも同様に全面作り直しをする事と致しました。作る度に新たな発見などあり、このように音楽に向き合っている今に感謝しております。(2020年6月)

■インヴェンションとシンフォニアについて

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ (Johann Sebastian Bach 1685-1750) のクラヴィーア曲は、その大部分がケーテンの宮廷楽長時代 (1717~1723) に書かれました。インヴェンションとシンフォニア BWV 772-801 (*Inventionen und Sinfonien* BWV 772-801) も、「フランス組曲」「イギリス組曲」「平均律クラヴィーア曲集第1巻」などと共にケーテン時代に書かれた作品の一つとなります。クラヴィーア曲の多くは、教育目的として書かれました。バッハには、自身が「いずれも生まれながらの音楽家」と誇らしく語る息子たちがおり、とりわけ豊かな才能に恵まれていた長男ヴィルヘルム・フリーデマンの教材として「ヴィルヘルム・フリーデマン・バッハのためのクラヴィーア小曲集 (*Klavierbüchlein für Wilhelm Friedemann Bach*)」(1720年頃) が編まれました。この曲集の中に「インヴェンション」の最初の形が見出される事となります。そこでは、2声の曲が「プレアンブルム」(*Praeambulum*)、3声の曲が「ファンタジア」(*Fantasia*) と題されていました。その後、バッハはさらに改訂し、1723年に配列も変え、題名も2声曲を「インヴェンツィオ」、3声曲を「シンフォニーア」と改めました。

自筆浄書譜には次のような表題があります。

「クラヴィーアの愛好家、とりわけ学習希望者が、まず2声部をきれいに弾き分けるだけでなく、さらに上達したならば、オブリガートの3声部を正しくそして上手に処理し、それと同時に、すぐれた楽想を得るだけでなく、それらを巧みに展開すること。そしてとりわけ、カンタービレの奏法を身につけ、それとともに作曲の予備知識を得るための、はっきりした方法を示す正しい手引き。」

シンフォニアもインヴェンション同様に、曲集に採用されています 15 調は、ハ長調 - ハ短調 - ニ長調 - ニ短調 - 変ホ長調 - ホ長調 - ホ短調 - ヘ長調 - ヘ短調 - ト長調 - ト短調 - イ長調 - イ短調 - 変ロ長調 - ロ短調 と 嬰ヘ短調、嬰ハ短調、変イ長調を除く 15 調が上行形に整えられています。(シャープ、フラット4つまでの調です。)

Sinfonia 1

Johann Sebastian Bach
BWV 787

1 1 25 4 1 1 2

1 4 1 2 1 1 2

1 4 3 1 3 4 5 45 2

1 4 3 1 3 4 5 1 2 3 1 1 1 3

4 2 4 3 1 3 5 3 1 3 5 1 3 1 2 4 3 2 4

5 3 1 3 5 3 1 3 5 2 4 3 2 4

5 1 5 1 1 1 1 3 5 2 3 2 1 1 3 5 4

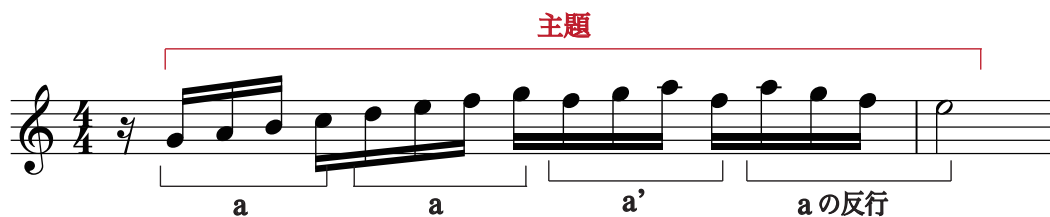
1 5 1 1 1 1 1 3 5 2 4 3 2 1 2 1 1 2 1

5 2 4 1 5 4 5

2. 第 I 展開部の楽曲分析と演奏法について

4つの展開部から構成されています。そして、第 I, II 展開部で第 1 部分、第 III, IV 展開部で第 2 部分と 2 部分性を示しています。

第 I 展開部は、1 ～ 6 小節です。主題提示部となっています。
主題です。



動機 a を元として形成されています。

1 ～ 2 小節は、上声に主題が置かれた後、中声に主題が置かれています。

C dur の上声主題の後、完全 5 度低く中声主題が置かれていますが、この中声主題は 3 拍目で G dur に転じています。この曲は、曲全体を通して一定の対旋律は保持されていません。冒頭 2 小節は、下声には八分音符による自由対位句が 2 回置かれ、中声主題の後半で上声に四分音符による自由対位句が置かれています。(1 小節下声には、動機 a の音型が用いられています。)

3 ～ 6 小節も主題が軸となり構成されていますが、主題+主題の反行形の組み合わせで 2 回（下声主題 + 下声主題の反行形、下声主題+中声主題の反行形）設置されています。